

1. 志雄町と杉野屋の概要

鹿 野 勝 彦

I. はじめに

II. 志雄町

III. 杉野屋

IV. おわりに

I. はじめに

金沢大学文学部文化人類学研究室では、2002年度の調査実習を志雄〔しお〕町南邑知〔みなみおうち〕地区の杉野屋において実施した。本報告書は当研究室の調査実習報告書としては18冊目のものとなるが¹⁾、例年と同様に、基本的には調査実習の参加者が調査で得た資料をもとに、それぞれの関心に基づいて分担執筆した各章から構成されている。

ただ今年度は1999年度以来4年ぶりに、複数の集落からなる地区ではなく、特定の集落を対象を絞って調査を行うこととなった。個別の集落を主対象とする場合と、複数の集落を含む地区を対象とする場合の実習のありかたは、それぞれに異なる特徴があり、長短を要約することは困難だが、本年度の方針自体は、主として実習参加者が例年に比べ比較的少なかったことなど、実務的な理由によるもので、特に深い意味があったわけではない。調査地決定に至るまでの手続きやその後の予備調査、諸準備作業から本調査、補充調査等を経て、報告書の作成までの過程については、本年度も従来の手順をほぼ踏襲しており、またすでに述べたこともあるので、ここには繰り返さない²⁾。

ただ上記のように、以下の各章は個々の参加者の個別の関心に基づいて執筆されており、それらを合わせても必ずしも集落の全体像は明らかとならない。そこで本章では、それらの記述を読み取るうえでの必要最小限の背景を提示することを目的とし、志雄町と杉野屋の概要について、立地、人口の動態、住民の生業や生活のありかたとその変化等について、現在の状況との連続性が明らかで、かつ聞き取り調査によって比較的信頼性の高い資料の得やすい1950年代以降を主に視野に入れて、一般的な記述と若干の分析をおこなうこととする。

II. 志雄町

志雄町は石川県の中中部、能登半島の基部の西側に位置し、南は押水町、北は羽咋市、東は富山県の氷見市と境を接している。西は日本海に面した千里浜の砂浜・砂丘地帯であり、南と東から東北にかけては標高200～400m前後の宝達丘陵の山林で、その丘陵地帯を源とする子浦〔しお〕川とその支流が合して日本海に注ぐ下流域の砂丘との間が、平坦な水田地帯をなしている。子浦川はその河口付近で羽咋川と合流するが、そのあたりはかつては邑知潟と近接していた。このように、町の面積は59km²強で広いとはいえないが、その町域にはさまざまに自然条件の異なる地区が含まれている。このことは町内の地区ないし集落における、もともとの生業のありかたにおおきな影響をおよぼしてきた。

町の西部の平地と砂丘の間にはJR七尾線が通っており、町域の南端には敷浪駅がある。また七尾線と平行してその西側を国道249号線が、その西の海岸沿いには能登有料道路が、さらに押水町北部で249号線と分かれた国道159号線(通称七尾街道)は町域を西南から東北に向けて丘陵の裾を走っていて、これらが現在金沢と能登半島の各地とを結ぶ主要な交通路となっている。このなかで七尾街道はかつて金沢と能登を往来するうえでの幹線であり、志雄町内の主要な集落はおおむねこの街道沿いに立地している。町の中心集落で、現在も役場が置かれている子浦もその1つであり、ここを起点として東へ向かう主要地方道16号線は、県境を越えて富山県氷見市、高岡市とつながっている。

行政的には現在の町の範囲は、かつての志雄村、南志雄村、北志雄村、南邑知村、樋川村が1933(昭和8)年に合併して志雄村となり、1936年に町に移行した後、1955年に押水町の旧柏崎村の一部であった敷浪、敷波両集落が加わって形成されたものである。これら旧村の範囲は現在でも町内の地区として多少とも意味を持っているようである(敷浪、敷波は現在は樋川地区に含まれる)。

しかし地区以上に自治的な単位として、住民の生活にとっておおきな意味を持っているのが、集落である。もっとも2001年度の町役場の資料には27の集落名が記されているが、そのうちの1つは1995年には世帯数が0となっており、また2001年末に世帯数5以下の集落も3つある。一方、世帯数100を超える集落も6あり、そのうち最大の子浦は世帯数381を数える。このように集落の規模だけを見ても、それらのあいだには著しい差があり、それは先に見たようなそれぞれの立地条件や歴史を背景としていることは、想像に難くない。それらについて個々の集落ごとに見てゆくことはここではしないが、以下に表で示す町全体についての統計数値は、そういった多様な集落のその集計値であり、集落や地区それぞれの実態は相当に多様であることに、注意しておく必要がある。

表1 志雄町の人口動態

年 度	世 帯 数	人 口	世 帯 平 均 人 数
1889 (明 22)	1,882	10,175	5.41
1955 (昭 30)	1,806	9,365	5.19
1960 (35)	1,824	9,418	5.16
1965 (40)	1,811	8,563	4.73
1970 (45)	1,838	8,005	4.36
1975 (50)	1,959	8,008	4.09
1980 (55)	1,993	7,921	3.97
1985 (60)	2,008	7,994	3.98
1990 (平 2)	2,006	7,706	3.84
1995 (7)	2,083	7,666	3.84
2000 (12)	2,110	7,348	3.48
増 減 比 率 *	116.5	86.2	73.6

* 1965 年を 100 とした場合の 2000 年の指数

資料出所： 1889 『志雄町史』現町域の数値
1955～2000 国勢調査

表2 志雄町の小中学校児童・生徒数

年 度	小 学 生 数	中 学 生 数
1965	975	585
1972	714	408
1993	533	322
2000	448	272
増 減 比 率 *	45.9	46.5

*表1に同じ

資料出所： 『町勢要覧』各年

表1は志雄町の世帯数、人口、世帯規模の変化を得られる資料からまとめたものである。この表からは、町の世帯数は全体としてわずかながら増加しているが、人口は減少傾向にあり、世帯の平均人数は縮小し続けていることがわかる。また表2は町内の小中学校の児童・生徒数の変化を示しているが、その数値は最近の35年間で半数以下になっている。いうまでもなく世帯の少人数化や少子化、高齢化は、志雄町に限らず、日本全体にみられる現象ではあるが、こ

こでは特にもともと小規模な山間地集落においてその傾向が著しく、高齢者の単身ないし夫婦によって構成される世帯の比率が増加し、結果として生活条件そのものが悪化する、典型的な過疎化が進行しているようである。

志雄町を構成する集落それぞれにおける生業のありかたは多様だと述べたが、1960年代前半ごろまでは、全体としてはその基幹産業はなお農業であったとってよさそうである。表3～5は町の生業のありかたに関わるいくつかの指標の変化を示しているが、これらからは、1960年代前半には町の世帯のほぼ4分の3が農家であり、かつその半数は農業から主たる収入を得ていた世帯であったこと、町の就業者の半数が農業従事者であったことなどがわかる。しかし1970年代に入ると、農家はなお全戸の3分の2を占めているものの、その大半は2種兼業農家となり、就業者中に占める農業従事者の比率も40%まで低下した。1980年代半ばには町の世帯のなかで農家の占める比率は50%を割り、かつそのほとんどが2種兼業となった。町域における耕地の面積も、その大部分を占める水田の面積も、1965年から2000年の間に、ほぼ3分の2に減少している。専業農家の数は1970年代から1980年代にかけて多少増加しているが、これはおそらく兼業農家の世帯成員が定年退職したために、分類上専業化したケースが大半を占めているものと思われる。要するに1960年代後半から1970年代にかけて、生業の中で農業の占める位置が著しく低下したわけだが、そのことは志雄町に限らず、多少の時期の差はあれ日本の多くの農村地域に共通する現象であるといえよう。

同様のことは、一部の集落で重要な生業として行われていた林業、漁業などの、他の第1次産業についてもいえる。海岸部の集落で行われていた漁業は、1950年代前半には姿を消し、山間地の集落における林業も、1970年代までは林道整備などに力が注がれていたが、外材との価格面での競争や、林業従事者の高齢化などから、次第に衰退していった。

これらにかわって町の産業としての重要性を高めてきたのが工業部門である。志雄町にはもともと比較的小規模ながらかなりの数の繊維関連工場などが立地していたが、1950年代後半以降は電子関連工場などを含め、周辺の市や町に比べても多くの工場誘致に成功し、それが町の財政の安定や住民の雇用の確保につながったとされる。これらのうち繊維関連工場は1970年代以降、業績不振に陥ったところも多いが、1980年代に入ると、製薬、軽金属関連の大手企業の工場の進出が続き、周辺の市や町に比べれば恵まれた状況の下で現在に至っているとされる。

一方第3次産業においては、子浦をはじめとする、旧村時代の中心集落や街道沿いに立地していた商店や各種サービス施設は、公共的なものを別とすれば、住民の生活スタイルの変化や生活圏の拡大、具体的にはその多くが通勤労働者化し、道路の整備や自家用車の普及により行動範囲が著しく拡大したことによって、やはり1970年代後半以降しだいに衰退していったようである。住民の日常的な買い物等においても、羽咋市の中心部や、近年ではさらにその周辺部

表3 志雄町の農家

年 度	世 帯 数	農 家 数	農家比率 (%)	農 家 種 別 戸 数 (比 率、%)		
				専 業	1 種 兼 業	2 種 兼 業
1951	—	1,349	—	786 (58.3)	334 (24.8)	229 (17.0)
1960	1,824	1,433	78.6	406 (28.3)	534 (37.3)	493 (34.4)
1965	1,811	1,343	74.2	154 (11.5)	523 (38.9)	666 (49.6)
1970	1,838	1,238	67.4	43 (3.5)	416 (33.6)	779 (62.9)
1985	2,008	933	46.5	60 (6.4)	69 (7.4)	804 (86.2)

資料出所： 1951 『志雄町史』
1960～1985 世帯数は国勢調査、農家数とその種別は農業センサス

表4 志雄町の産業類型別就業人口

年 度	総 人 数	第 1 次 産 業		第 2 次 産 業		第 3 次 産 業	
		人 数	比率 (%)	人 数	比率 (%)	人 数	比率 (%)
1960	5,044	3,055	60.6	1,002	19.9	987	19.6
1965	4,712	2,355	50.0	1,279	27.1	1,078	22.9
1970	4,600	1,840	40.0	1,426	31.0	1,334	29.0

資料出所： 『町勢要覧』 各年

表5 志雄町の耕地（単位：ha）

年 度	合計	田	畑	樹園
1960 (昭 35)	1,047	853	177	17
1965 (40)	989	832	135	22
1970 (45)	958	830	93	35
1975 (50)	828	706	74	48
1980 (55)	792	678	72	42
1985 (60)	777	666	61	50
1990 (平 2)	725	626	42	57
1995 (7)	649	578	39	32
2000 (12)	625	559	39	27
増 減 比 率 *	63.2	67.2	28.9	122.7

* 表1に同じ

資料出所： 農業センサス

にあらたに進出した大型店舗の利用が増加している。

いいかえればかつての地域における中心集落は、その中心性をしだいに失ってきたのである。また町内に6つあった小学校(他に分校が1校)のうち、樋川小学校を除く5校が1974年に統合されたことに示されるように、公共の施設や交通機関は、近年は一般にいわゆる合理化の名のもとに、整理されてゆく傾向がみられる。こういった傾向は、町の住民のなかでも、特に山間地集落の住民や、自分では自動車を運転しない高齢者などの生活におおきな影響を与えているが、大筋としては時代の趨勢としてやむを得ないものと受け止められているようである。

Ⅲ. 杉野屋

杉野屋は町の北部に位置する南邑知地区のなかでも最北部にあつて、羽咋市と接している。集落は西南から東北にはしる七尾街道にそつて、おおむねその東側に、背後に丘陵を背負うようなかたちで家並みを連ねており、街道の西側は開けた水田地帯となっている。この水田地帯の一角に先に述べた大手進出企業の工場の1つが立地しており、そのさらに西側には子浦川がほぼ南から北へ流れている。集落のなかほどには、集落をほぼ南北に貫く道があり、その道を集落の南端から東南にたどると、杉野屋をはじめ羽咋市のいくつもの集落の水田の水源である溜め池の縁を経て、向瀬へいたる。また七尾街道から西にのびる道路は、先に述べた工場の前を通つて子浦川手前で北に折れ、国道159号線と249号線を結ぶ道路に合しており、これが現在では集落と羽咋市方面を結ぶ主な経路となっている。

集落の東部には菅原神社が、また西部にはいずれも浄土真宗本願寺派に属する安専寺、光照寺の2つの寺院がある。また集落の中央部には集落の集会所(公民館分館)が、西へ延びる道路沿いには杉野屋のバス停留所と郵便局があるが、その他の公共施設は集落内には存在せず、商店等もあまりない。

杉野屋の世帯数、人口等の近年の変化は、表6のとおりである。杉野屋は子浦町の集落のなかでは比較的規模のおおきな集落であり、交通などの立地面でも恵まれた条件のもとにあるように見えるが、町全体の統計と比べると、近年の増減の比率は、世帯数でも人口でも下回つていて、住民自身からも杉野屋は過疎化しつつあるとの声が聞かれる³⁾。調査時点での集落住民に占める子供(15歳未満)の数は63人(10.6%)、高齢者(65歳以上)の数は170人(28.7%)であり、この点からも過疎化の指標の1つである高齢化がかなり進んだ集落と言える。

表6 杉野屋の人口動態

年 度	世 帯 数	人 口	世帯平均人数
1965 (昭 40)	174	787	4.52
1970 (45)	170	713	4.19
1975 (50)	174	723	4.16
1980 (55)	171	705	4.12
1985 (60)	169	675	3.99
1990 (平 2)	168	653	3.89
1995 (7)	163	615	3.77
2000 (12)	162	570	3.52
2002 (14)	166	593	3.57
増 減 比 率 *	93.1	79.9	84.0

* 表1に同じ

資料出所： 1965～2000 国勢調査
2002 町役場資料

表7-1 杉野屋の世帯 (2002 年、形態別)

形 態	実 数	比率 (%)
単 身	23	13.9
夫 婦	29	17.5
2 世 代	51	30.7
3 世代以上	63	38.0
合 計	166	100

表7-2 杉野屋の世帯 (2002 年、人数別)

人 数	実 数	比率 (%)
1	23	13.9
2	37	22.3
3	24	14.5
4	25	15.1
5	28	16.9
6 以上	29	17.5
合 計	166	100

資料出所： 町役場資料 (2002)

また杉野屋の世帯をその形態と人数別にまとめると、表7-1、2のようになる。ここからは全世帯の30%強が、単身ないし夫婦よりなる世帯であることがわかるが、そのほとんどが高齢者で構成される世帯である。ただ一方で、世帯の40%弱は3世代以上の成員を含む、いわゆる直系家族で構成される世帯であり、世帯の平均人数においては、杉野屋の数値は、町の平均を上回っている。

表8 杉野屋の農家

年 度	世 帯 数	農 家 数	農家比率 (%)	農 家 種 別 戸 数 (比 率 、 %)			請 け 負 い 農 家 数	請 け 負 わ せ 農 家 数
				専 業	1 種 兼 業	2 種 兼 業		
1960	174	164	94.3	42 (25.6)	65 (39.6)	57 (34.8)	—	—
1970	170	130	76.5	3 (2.3)	32 (24.6)	95 (73.1)	—	75
1975	174	127	73.0	4 (3.1)	22 (17.3)	101 (79.5)	6	56
1980	171	112	65.5	4 (3.6)	1 (0.9)	107 (95.5)	8	74
1985	169	104	61.5	5 (4.8)	4 (3.8)	95 (91.3)	4	57
1990	168	86	51.2	8 (9.3)	2 (2.3)	76 (88.4)	7	73
1995	163	75	46.0	7 (9.3)	1 (1.3)	67 (89.3)	2	56

資料出所： 世帯数は国勢調査、その他は農業センサス

表9 杉野屋の兼業農家の兼業形態

年 度	兼業農家数	主 な 兼 業 形 態 (比 率 、 %)		
		恒 常 的 勤 務	出 稼 ・ 臨 時 雇	自 営
1960	122	62 (50.8)	32 (26.2)	28 (23.0)
1970	127	96 (75.6)	19 (15.0)	12 (9.4)
1975	123	89 (72.4)	17 (13.8)	17 (13.8)
1980	108	82 (75.9)	17 (15.7)	9 (8.3)
1985	99	88 (88.9)	3 (3.0)	8 (8.1)
1990	78	68 (87.2)	4 (5.1)	6 (7.7)
1995	68	61 (89.7)	2 (2.9)	5 (7.4)

資料出所： 世帯数は国勢調査、その他は農業センサス

生業面からみると、杉野屋はもともとは典型的な農村であったといつてよいであろう。表8、9は杉野屋の農家のありかたを、主に農業センサスに基づいてまとめたものである。表8からは、1950年代までは集落のほとんどの世帯が農家であり、かつその60%以上が農業を主たる生業としていたことがわかる。1960年代以降は、ここでも農家の絶対数や比率は減り、農業の占める比重は急速に低下していくが、それでもここでは1980年代末までは、全世帯のなかで農家の占める割合が50%以上であったことから、町内の他の集落に比べれば、農業が相対的にはよりおおきな役割を担っていた集落といえそうである。

しかし、農家の兼業状況を示した表9からもわかるように、杉野屋においても、1980年代以降は農家の2種兼業化の傾向は著しく、かつその兼業のほとんどは恒常的な勤務の形をとるよ

うになった。このことは先にも述べた、町内への進出企業などの雇用への依存が強まったことを意味している。いいかえれば、表7にみるような、世帯の形態の2分化は、世帯の成員がこういった雇用先を通勤圏内に確保できるか否かによって決まる部分が、相当におおきいと考えられる。

もっとも現在では自家用車を使つての通勤が当然のこととなっており、したがって雇用先はなにも集落内や町内である必然性はない。住民の、とりわけ若い世代における高学歴化等を考えれば、就職志望先の多様化も当然のことであり、こういった人々にとっては、町内や羽咋市、七尾市をはじめとする近隣の、かつては地域の中心地として一定の役割を果たしていた地区の、中心地性の相対的な低下が、よりおおきな問題であるのかもしれない。

また住民がそこに住み続けるという選択をするか否かにとって、いうまでもなく雇用先の有無は大きな要因ではあろうが、唯一のそれであるわけではない。ここでそれらの要因について網羅的に検討することは出来ないし、住民それ自体が、現在ではさまざまに多様化していることも、わざわざ指摘するまでもなかろう。とはいえ例えば、とりわけ若い世代の人々にとっては、金沢はすでに、週末には日帰りでショッピングや行楽に出かけることのできる、身近な町となっているが、それはいいかえれば、こういった人々にとっては、生活のなかでのいわゆる消費や文化の面での欲求が強く、近隣の小都市がそのような欲求を満たす場としての魅力に欠けているということを意味していよう。

IV. おわりに

能登半島の付け根にある志雄町は、県の中心都市としての金沢との関係において、通勤も不可能ではないという微妙な位置にあるが、その町域のなかで杉野屋は北端にあることで、他の集落とは多少とも異なる立地条件に置かれているといえる。もっともそういったいわばミクロな差異は、例えばこの一帯で育った多くの人々が首都圏や関西などの大都市へ就学、就職のために転出して、そのまま戻ることなく、ただし出身地に残った親族や地域そのものとはその後一定の関係を保つようになるという、地域における共通性と合わせて考えなくてはならないはずである。限られた範囲での調査では、こういった点に踏み込むことは困難であるが、今後の課題としておきたい⁴⁾。

本報告書においても、例年と同じく、初めて実地調査を行う学生の実習調査報告書という限界から、その内容は極めて不十分なものとならざるを得なかったが、常に懇切なご協力を頂いた杉野屋の方々、志雄町役場をはじめとする関係機関の方々には、心より御礼申し上げますと

もに、忌憚のないご批判、ご叱正をお願いする次第である。

注

- 1) 既刊の調査実習報告書の一覧は、巻末の「参考文献・参考資料」に掲げておいた。
- 2) 具体的には1999年度の報告書『富来町地頭町』を参照されたい。
- 3) 2000年から2002年にかけては、世帯数、人口が増加したように見えるが、2002年の数値には、実際には普段は集落に居住していない人々(主に学生)がある程度含まれており、単純に比較できない。
- 4) 従来の本研究室の調査実習においてこのテーマを扱った例として、榎戸蓉子、「在京鉤打郷友会と地域」、「中島町鉤打地区」2000、pp.106-123がある。